

## 容堂公と春嶽公

角鹿 尚計(つのが・なおかつ。福井市立郷土歴史博物館)

### I 山内容堂と松平春嶽

幕末の福井藩主松平春嶽(慶永)と土佐藩主山内容堂(豊信)は、共に公武合体を進めるなど親密な関係にあった。春嶽は容堂を親友とし、近來の英雄の一人に加えている。春嶽とは援けあい励まし合い。互いに憧憬し敬意をはらった。

・土佐藩と福井藩

○山内氏:24(表高 20, 26)万石。藩祖一豊、長宗我部氏の領知を与えられて以来ほぼ一貫して土佐国を領有。外様。容堂は分家(南邸)豊著とよあきらの子、相次ぐ本家の不幸により島津斉彬・伊達宗城・阿部正弘らの配慮?により15代藩主となった。家臣団は山内家の掛川城主時代までの譜代臣、大坂牢人を取り立てた臣、長宗我部旧臣と郷士(在郷武士)で構成。

○越前松平氏:はじめ68万石。藩祖秀康(徳川家康二男・二代将軍秀忠の実兄)朝倉氏の後、柴田・丹羽・堀・青木らの支配を経る。二代藩主松平忠直改易。その弟忠昌相続。六代綱昌改易半知。七代吉品再興、幕末期32万石。支藩多い。親藩。家門筆頭。16代春嶽(慶永)は、田安德川家よりの養嗣子。家臣団は、結城秀康・松平忠昌・昌親(吉品)代に世の名将(武田・上杉・朝倉・明智等の旧家臣団)の子孫や個人を抜擢して家臣団にした。とにかく新しい大名なので藩祖以降の歴史しかない。寄せ集めの感がある。上・中・下級さらに各三段階ぐらい。郷士身分の者はいない。府中(武生)本多家は家臣。

### ○春嶽と容堂

春嶽と容堂が知り合うようになったのは、安政4年(1857)10月7日福井藩邸で行なわれた『大学』講会とされており、以降容堂が亡くなるまで二人の親交が続いた。このとき橋本左内が侍講を務めた。立花鑑寛、池田慶徳、松平直侯(川越藩)の三大名も同席した。単なる大学講義であったかどうかは不明。

人 柄 平尾道雄(人物叢書『山内容堂』)

容堂:デラックス(豪華・華麗)、南国的な情熱家・詩人・書・酒・美人を愛する。

乗馬・居合は非凡。詩酒放浪。色白で眉目に秀でる。号「鯨海酔侯」「九十九洋外史」「酔擁美人楼」

春嶽:真摯繊細、誠実実直、温厚で優しい。歌人・詩人・酒食はさほど好まない。仕舞・能・茶道などは好まず、洋の東西の学問に傾注。英語力がある。進取の気性に富むが、敬神崇祖尊皇の念が篤い。

・「忍堂」より「容堂」に。一橋の英明、春嶽の誠実、これにわが果敢しかし藤田東湖には頭が上がりなかつたという(『徳川慶喜公伝』・橋本左内書安政4年11月9日付村

田氏寿宛)。「衆を容るるは人君の徳」(容堂詩「懐人十首」)

・「春嶽」の出典は富士と三保の松原の自画賛に「とりよらふふし(富士)の高嶺の雪よりも高きは君か恵也けり」とあることなどが参考となる。

### ○藩政改革 人材登用

容堂=吉田東洋・小南五郎右衛門こみなみ〔藤田東湖「古大臣の風」謹直な人物、若狭小浜山口菅山(崎門学)門下。酒色など容堂に忠告諫言〕。小南=謹直忠誠。吉田=才識手腕。春嶽=中根雪江(春嶽の影に沿うように補佐)・浅井政昭(春嶽に種々諫言)・橋本左内〔俊秀。藤田東湖激賛。吉田東篁(崎門学)門下〕。雪江・政昭=謹直忠誠、左内=才識 他に長谷部甚平・三岡八郎(由利公正)・佐々木長淳など。

・容堂、春嶽の共に敬する藩公として、島津斉彬、また共に水戸斉昭に従う。

### ○将軍継嗣・条約問題(これは一体の課題であることに注意)

・容堂=函館と長崎の視察をさせて将来の開港地として重要視する。

・春嶽=長崎の小曾根乾堂と親交。福井藩御用商人。

容堂を一橋派に勧めたのは春嶽とされる。橋本左内書簡村田氏寿宛

「これにより君公はからず一知己の御友遊を獲給ひし御心地にて御喜び斜めならず、拙者輩に於ても陰ながらありがたく存じ奉り候」容堂の論舌は一流。

・容堂正室は三条実万養女。斉彬養女は天璋院(将軍家定夫人)。将軍家定の生母本寿院の実姉、本立院は福井14代藩主故、松平斉承女中。こうした繋がりを利用し、公家三条家・大奥への入説を行う。左内・西郷隆盛。

・春嶽は慶喜を将軍継嗣とせよとの勅旨を得るため容堂と協力して堀田正睦を説得。しかし堀田は保留。春嶽・容堂の内談により左内の京都派遣(表面上は航海術原書取調用向)。容堂の紹介によって左内は内大臣三条実万に数度にわたって説得。しかし三条は外交問題が不得手。鎖国攘夷より抜けきれず。容堂は左内の応援の為、家臣の大脇興之進を起用して京都へ密行させる。

・井伊大老は勅許を待たず通商条約に調印。一橋派諸侯は井伊に抗議。不時登城。処分を受ける。春嶽隠居謹慎。容堂は春嶽の責罰の報を受け書簡を送る(明日は我が身か?)。安政の大獄。容堂安政6年2月26日依願隠居。容堂と号する?のち謹慎の命を受ける。

・桜田門外の変・謹慎解かれる。土佐勤王等事件(土佐藩も福井藩も公武合体論であったことに留意すべき)・容堂、後藤象二郎らに命じて将軍に政権奉還を建白。容堂小御所会議で岩倉と激論。「第三極政権」を模索。龍馬暗殺。

### ○松平春嶽の観た山内容堂(春嶽著『逸事史補』による)。

容堂は正直の人。頼山陽の書を好む。朝幕の和平を専務とする。勤王の志高く、一己の見識あって家来に使役される人ではない。浪費家。陶淵明の志を尊び名利を求めなかつた。亡くなる前、参内して天皇の御前に進み、「方今の天子様は何もかも御政事遊ばされ、御大事に候」と申し上げた。

## II 春嶽公記念文庫の史料より

### ①山内容堂筆「品川竹枝并引」の詩幅

軸裏書に、春嶽自筆で「品川竹枝容堂親友所贈 春嶽永清玩」とある。春嶽は島津斉彬を「英雄」と称し、容堂を「親友」と称している。

### ②山内容堂筆「下江舟中懐」の詩幅

京都から大阪へ淀川を下る舟の中で、京都に滞在する春嶽への所感を賦したもので、楷書体で揮毫されている

### ③春木南溟筆「多武峰春景・高雄秋景」の図（山内容堂賛）

春木南溟は幕末の画家。容堂が賛を添えて春嶽へ贈ったもの。桜と紅葉の名所として知られる、多武峰（奈良）の春景と高雄くたかお（京都）の秋景が描かれている。

### ④「春岳真逸」の印章（山内容堂刻）

印の側面に彫られた内容から、容堂が明治元年（1868）6月に自ら彫って、春嶽へ贈ったものであることがわかる。

### ⑤文珪筆「郭汾陽」の図（山内容堂・伊達宗紀賛）

春嶽の依頼により、容堂と宗紀が絵に賛を添えたもので、宗紀の落款に「六十七翁」とあることから、安政5年（1858）時のものと思われる。

### ⑥脇差

中子（柄に差し込む部分）に刻まれた銘により容堂自らが梅花の季節に鍛造したものであることがわかる。

### ⑦四老公肖像写真衝立

慶応3年（1867）4月、春嶽は朝廷の命により上京し、容堂・島津久光（薩摩藩）・伊達宗城（宇和島藩）と共に時局打開策を協議した（四侯会議）。その間の5月14日、将軍徳川慶喜が二条城で撮影させた4人の肖像写真で、春嶽によって小衝立に仕立てられている。

### ⑧山内容堂肖像写真、松平春嶽肖像写真 いずれも、撮影年代は不詳。

写真の普及状況などから、元治・慶応年間（1864～68）のものと思われる。

### ⑨山内容堂筆「養賢堂」の扁額

安政5年（1858）正月25日に、容堂が春嶽の別号である「養賢堂」を揮毫（きごう）して贈ったもの。その字からは同じ一橋派大名として活動を押し進めようとする、容堂の強い意志が伝わってくる。

### ⑩朱昂之筆「松壑雲泉」の図

明治5年（1872）6月21日、容堂は療病生活中46歳亡くなった。この品は8月22日に山内家より春嶽へ贈られた遺愛品。春嶽が記した箱書や端裏書には「容堂親友」「容堂友兄」とある。朱昂之は清の時代の画家。

### ⑪山内容堂書状

安政5年（1858）春嶽は一橋派の中心人物として、将軍継嗣と日米修好通商条約調印の問題に取り組んでいた。南紀派の大老井伊直弼らと激しく対立、幕府は7月5日に春嶽へ対し隠居急度慎を命じた。同日春嶽が容堂に送った書簡の返書。容堂は春嶽の処罰に驚きと悲しみを表し、さらに「僕も亦不日如何可相成や」と自らの処分を予想し、愛用の猪口を贈ると慰めている。

### ⑫朶雲群集

朶雲群集は、旧福井藩士で初代福井市長を務めた鈴木準道が、松平家の家令時代に春嶽へ頼み、幕末維新期に活躍した公卿や諸侯らの手紙を譲り受けて、折本に仕立てたもの。朶雲とは手紙のこと。群集には27人の人物からの手紙があり、容堂のものも一通含まれている。時期は明治初年頃と推定され、体調のことや「参朝」することなどが記されている。

### ⑬登京日記一

慶応3年（1867）4月、長州休戦後の処分や兵庫開港の問題などを解決するため、松平春嶽や伊達宗城・島津久光が朝廷の命により京都に集結した。いわゆる「四侯会議」の開催である。春嶽の日記からは、登京が遅れていた山内容堂の到着を待ち望んでいたことが伝わってくる。薩摩藩なども容堂が最も公卿の人物を承知しているとして、人事などに期待を寄せていた。

### ⑭滞京日記二

慶応3年容堂が5月1日に入京すると、4藩と朝廷・幕府の間では政治的動きが活発となり容堂は春嶽と密接に連携し薩摩藩に対抗する立場をとる。同月14日二条城で将軍徳川慶喜と四侯が会談した翌日、容堂は春嶽を藩邸に招いて密談する。容堂は互いが朝廷・幕府を主張することなく、四侯と将軍や摂政が姦人を交えずに直接論議することが重要であると主張。

### ⑮山内容堂筆「容堂先生難船を見て笑ふ図」

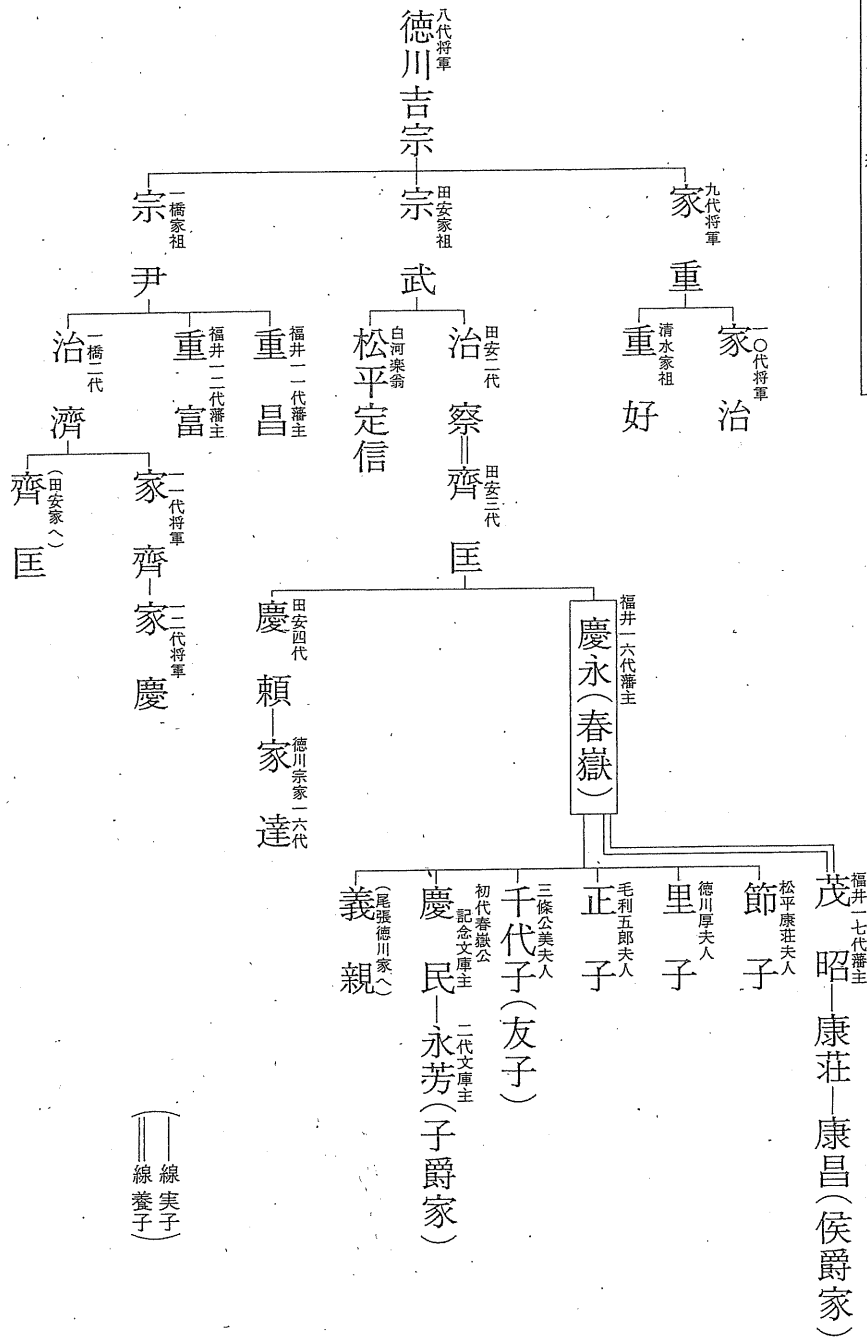
容堂が江戸湾で難船（なんせん）を目撃し、その様子を戯画に描いたもので、春嶽へ贈られた。画中には「容堂先生難船を見て笑ふ図」や「客ノ舟潮ニ被引房州ノ方へ流行図」などと記されている。

### ⑯海南石硯（附山内容堂添書）

容堂が春嶽へ贈ったもの。添書に見える海南石の海南とは四国を意味し、天然石であると記されている。

●山内容堂公御手書 越葵文庫蔵 春嶽と容堂との間での書簡は多い。

松平春嶽公關係系譜



掛けまくも畏き正二位山内の卿の御柩の御前に正二位松平慶永、鹿自

物、膝折り伏せ、鵜自物、項ね突抜けて、畏み畏みも白さく。往年君に始めて逢い

奉りしに、頓に己を知るの友垣の隔てはあらぬ中となりて、兄弟にも超ゆる交りを為すからに、身の浮沈を与じし年久しく君の後に従ひて

皇国の大御為に命を忘れ、心と力を尽くし、共に言葉にも尽くし難き艱苦を

成して、禍事は雲の如く散り果てて古昔の大御代の政に復りて明かに治まる

正しき政の新たなるも君の大御蹟と誰も称へて永く伝えて仰ぐべし。空蟬

の世の中、安く静かになりて、塵埃を払ひし如く、世を遁れて、君には橋場に住み給ふ。

己も茲に廬を結びて、墨田の川に朝夕舟をべて与に花月雪を愛で、

風雅の物語りをも成して幾春秋も楽まむと欲するに、思ひきや此月の末の一日、

病ひの重りて皎なる月の光は雲に隠れし如く此世を退り給ふとは聞くからに一の兄弟

と頼み依りたる朋友を失ひたる嘆きの杜の夕立の涙偃きあへで止むべき柵も無く胸塞

りて過し昔の事ども、今の事ども、かにかくと思ひ続けて我のみを独り茲に残し給ふ

恨めしさ、白すまでも無く、明日は函崎の御館へ帰り給ひ、葬りも近しと聞くから、今

日は拝み奉りて、常盤に堅岩に栄か行き給へと祈り、甲斐なき榊と三十

歳を経よと思ひ、甲斐なき桃の実とを捧げ奉りぬ、嗚乎、痛ましや、嗚乎哀しや、

山内の君よ、我祭る此の志を天翔り給ふ御魂の暫し茲に留まりて平らけく

安らげく聞し食すと白す。(原文は真仮名)

明治五年壬申六月廿六日

正二位松平慶永